

第1A（中）分科会 —教育課程に関する課題—

提案主題 9年間を通した小中一貫教育カリキュラムの創造のための教頭の役割
～施設一体型の利点を活かした小学校教員と中学校教員の協働～

司会者	豊後高田市立河内中学校	渡 邊 昌 教
提言者	豊後高田市立小中一貫校戴星学園	古 野 光 博
助言者	中津教育事務所次長兼指導課長	安 田 憲 司
記録者	豊後高田市立高田中学校	河 野 信 一

1 協議の柱

小中学校教員の協働体制を確立するために教頭の役割はどうあればよいか。

2 協議の実際（内容）

(1) 質問とその回答

- ・質問：小中一貫校のメリットは何か。
- ・回答：小・中それぞれの良さを活かした指導ができる。時間割で苦労がある。
- ・質問：小・中の協働体制について、分掌会議をどのように設定しているのか。
- ・回答：大きく3つの分掌にして、小中教員を配置しており、週1回開催が基本。特に、全体での「小中のすり合わせ」の時間が限られているため、「一貫校として何ができるのか」を意識して、分掌ごとに動くことが大切である。
- ・質問：運営委員会および研究テーマについて。
- ・回答：運営委員会で職員への指示促進体制の徹底を図っている。主幹教諭が教務の中心を担っており、小学校の教務主任は主幹教諭を補佐している。研究テーマは、小中同一で設定している。

(2) 各グループでの討議内容

- ・小中の協働体制を構築するために教頭として、9年間を見通したカリキュラムの作成や時間割の組み方の調整、乗り入れ授業の推進等に配慮し、職員の意識改革をしていくべきである。
- ・中1ギャップ解消や乗り入れ授業、生徒の支援体制の強化等、小中一貫校のメリットは小中のシステムの違いを融合させることでさらに大きくなる。
- ・小中一貫校での授業パターンづくりを教頭がリードするなどして、「一貫校では小6が育ちにくい」といった問題にも、委員会や行事で各学年に適宜活躍の場を設定していけばよい。

3 指導助言

教頭として、全教職員に「一貫校として、何をしなければならないのか」を徹底させることが求められる。なぜ、乗り入れ授業やTT指導等を推進していくのか、その目的の共有を図り、小中一貫校だからできること（メリット）を明確に示し、その教育目標の達成のために教職員が組織的に取り組める体制づくりをするのが教頭の職責といえる。

小中一貫のモデル校としての取組みを他校に広げていくためにも、今の取組みの検証を行い、成果と課題を明確にし、学校全体で共有を図るとともに、9年間で「どんな力を児童・生徒に定着させていくか」を明確にして、一貫校として取り組む中で課題を解決していくことが求められる。